

お彼岸の話

「お彼岸の中日は中道の教え」

お彼岸の七日間のうち、真ん中にあたる日を「中日(ちゅうにち)」と言います。春は春分の日、秋は秋分の日と呼ばれています。この日は太陽が真東から出て真西に沈み、昼と夜の長さが同じなので、仏教の「中道(ちゅうどう)」の教えにたとえられます。

中道とは、お釈迦様の教えで、あまりにもつらい修行も、快樂にふけてばかりいる生活も、どちらでも好ましくないとされました。二つの極端なものから離れて、真ん中の道を行くことを中道と言います。

「暑さ寒さも彼岸まで」と言うように、お彼岸の頃は、暑くもなく寒くもなくちょうどいい季候です。これも中道にたとえられているのかもしれない。

春の彼岸会のご案内

平成二十年三月二十二日(土)

午後一時 彼岸法要

塔婆回向

午後二時 お説教

宝幢寺住職

京都布教団長

釋 真行 師

今回のお説教師の釋真行さんは、上高野にある宝幢寺のご住職です。当寺には初めてお越しいただきます。京都の布教団の団長をされている布教の先生です。どうぞお誘い合わせの上、ご参詣して頂きますようお願い致します。合掌

※本堂はイス席です。多数のご参詣を心よりお待ちしております。

あとがき

▽春のお彼岸がやってまいります。お忙しい方は、お説教からでも結構ですので、お気軽にお越しください。

▽来月四月八日は、お釈迦さまの誕生日「花まつり」です。花まつりでは、お釈迦さまの仏像に甘茶をかけてお祝いします。当寺の本堂でも甘茶をかけられますので、どうぞ、お立ち寄りください。(四月八日、一時から四時まで)

▽先日、法然上人八百回大遠忌お待ち受け法要に出仕してきました。三日間で京都市内三ヶ寺、府下二ヶ寺で法要が営まれました。全国百ヶ寺をまわるお待ち受け法要も約三分の一の三十ヶ寺が終わりました。

平成二十年三月一日発行

浄土宗西山禅林寺派

常林院

月影



第 22 号

しよぎようむじよう

諸行無常

ぜしようめつぽう

是生滅法

しようめつめつひ

じゃくめついらく

生滅滅已

寂滅為樂

しゃか
釈迦

ものはみなうつり変わる

お釈迦さまがお亡くなりになる前に説かれたお経に、「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂」という偈文があります。意味は「ものはみなうつり変わり、現れては滅びる。生滅にとられることなくなりて、静けさと安らぎは生まれる。」というものです。

この偈文にはこういう物語があります。

昔、ヒマラヤ山に真実を求める行者がいました。お金や名譽は一切望まず、ただ迷いを離れる教えを求めていました。天はこの行者の行いに感動し、その心のまことを試そうと、鬼の姿となってあらわれ、偈文の前の二行



「ものはみなうつり変わり、現れては滅びる」を歌いました。行者はこの歌声を聞き、これこそ求めていたまことの教えであると思い、恐る恐る鬼に近づき、「その歌には私の求めているものがある。どうか歌の続きを教えてもらいたい。」と頼みました。

しかし鬼は、

「いま私はとても空腹だ。もし人間の温かい肉を食べ、血をすすることができれば、続きを歌ってやろう。」と言いました。

これを聞いた行者は、歌の続きを聞かせてもらえらば、聞き終わってから自分の身を与えると約束をしました。すると鬼は残りを歌いだし、歌は完全なものとなりました。

「ものはみなうつり変わり、現れては滅びる。生滅にとられることなくなりて、静けさと安らぎは生まれる。」行者はこの歌を木や石に彫りつけ、やがて木の上のぼり、身を鬼の前に投げ与えました。その瞬間、鬼は天の姿にかえり、行者の身は天の手に受けとめられました。

この物語の行者は、お釈迦様の前世の姿であると伝えられています。そして「諸行無常・・・」の偈文は、仏教教義の基本を教えています。法隆寺に伝わる国宝、玉虫厨子（たまむしのずし）の右側面にこの物語の絵が描かれています。先日、複製が作られたと報じていました。

お経の話

〜何が書いてあるの？〜

浄土宗西山勤行式（赤本）解説

三宝礼

いっしんきょうらい じっぽうほうかい じょうじゅうふ

一心敬礼 十方法界 常住佛

いっしんきょうらい じっぽうほうかい じょうじゅうほう

一心敬礼 十方法界 常住法

いっしんきょうらい じっぽうほうかい じょうじゅうそう

一心敬礼 十方法界 常住僧

（読み下し文）

- 一心に敬つて十方法界常住の仏を礼したてまつる。
- 一心に敬つて十方法界常住の法を礼したてまつる。
- 一心に敬つて十方法界常住の僧を礼したてまつる。

（現代語意訳）

いかなるところにもつねにあります仏さまを、心から敬い礼拝いたします。

いかなるところにもつねにあります仏さまの教えを、心から敬い礼拝いたします。

いかなるところにもつねにあります仏さまの教えを信じ仏道修行に励む方々を、心から敬い礼拝いたします。

まごころを込めて仏・法・僧に礼拝する

三宝礼は、仏・法・僧の三宝を礼拝することから三宝礼と言います。

仏法僧の仏とは、釈迦さまのことです。法とは、仏教の教え、つまりお釈迦さまの教えのことです。僧とは、僧伽（サンガ）を略した言葉で、仏教を通じて仏道修行をする人々の集団のことです。したがってお坊さんたちだけではなく、仏教を信じる信者の人たちも含めていいです。仏教徒は昔からこの三つを変わらない宝として敬ってきました。

さて、三宝礼を読んでみると、仏法僧の三宝のすべてに「十方法界常住」という言葉がついています。

十方とは、東西南北の四方と、その中間の東北・東南・西南・西北の四方と、上下の二方をあわせたもので、ありとあらゆるところという意味です。法界とは、この世に存在する一切のもののことです。常住とは、常に住する、常に存在するということです。

したがって「十方法界常住」とは、「あらゆるところにいきわたり、いつまでも変わることなく存在する」という意味になります。

いつまでもあらゆるところに変わらず存在する仏法僧を心に思い、まごころを込めて礼拝しましょう。

我慢（がまん）

我慢というのは、耐え忍ぶことで、「がまん強い」「がまんする」といえば、ほめ言葉に使われます。しかし、もとの仏教語では意味が違い、自分をたよりにして心おごること、他人をさげすみ自分をえらく思う慢心のことを言います。貪り（むさぼり）瞋り（いかり）愚癡（ぐち）慢（まん）という四つの煩惱の一つに数えられています。

あきのかみ
「安芸守平清盛、天位も恐れぬ我慢の相」とうたっているように、あの平清盛のおごり高ぶっていた様子を我慢の相とっています。



仏事と作法

問）

お葬式や中陰の間は、仏壇は閉じたほうがよいのですか？それとも開けておいたほうがよいのですか？

答）

普段どおりに開けておきます。

地方によって、また人によってお通夜、お葬式、中陰中は仏壇の扉は閉じておかないければいけないという人がいますが、仏教の教えにはありません。むしろ仏壇は法要の中心になるべきものなので、扉を開け、灯明をともししておくほうが自然といえます。

ではなぜ、仏壇を閉じるといふ説が出てきたのでしょうか。これは、日本古来の宗教である神道では、神は死のけがれを忌み嫌うと考えられており、神の目にけがれがふれ

ないように神棚に白紙をはる「神棚封じ」が、いつのまにか仏教にも適用されて、仏壇の扉を閉じておく、という説がでてきたと思われるます。

また、自宅でお葬式をする場合、仏壇の扉を開けておくスペースがないということも原因の一つと思われるます。

しかし、おかしなことに、お坊さんの間でも、意見は分かれています。我が宗派でも仏壇を開けるという人と、閉じるという人がいます。閉じるという人たちは、それぞれにいろんな理由があるようですが、やはり、仏壇は家の本堂にあたるものであり、法要の中心になるものだと思います。扉を開けてお勤めするのが自然ではないでしょうか。